



(有)西南農場 代表取締役

宮井能雅

北海道夕張郡長沼町

【プロフィール】

みやい・よしまさ ●1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約8000万円。

読者にもご覧になられた方が多いと思うが、10月20日にNHKで「日本の、これからどうする？ 私たちの主食」という生放送の討論番組があった。そこで確信的に悪役を演じる北海道の生産者がいたのをご記憶ではないだろうか。討論番組に出演している生産者のなかでは数えるほどしかないコメ自由化容認派で、大胆な発言を繰り返していた男。それが今回の主人公である宮井能雅である。

悪役を演じる正直者

「父の代までコメを作っていました。今は約100haの水田すべてで麦と大豆を作っています。コメが生産過剰になるから転作をしらうといって補助金を出してくれる。それが10aでいくらになるかは、農家の皆さんなら知っているでしょ。国はコメを作らせないために壮年に税金を使ってくれている。だから私はハッピーです。皆さんも転作をしたら？」

農協米価が下がり、稲作農家の経営が危機に瀕しているというのが番組の伏線。番組の演出のせいもあって、出演農家の多くが被害者意識的にコメ農業や農村の困難を語っていたが、宮井のひと言は彼らを一瞬絶句させた。

110haの経営耕地（内自作地55ha）で、麦50ha、大豆60haを作る。収量は麦で10a当たり平均630kg（一等）、大豆は240kg。地域における麦の平均反収は360kgだから、

取材・文／昆吉則 撮影／編集部
圧倒的な収量の差だ。同じ北海道でも十勝や網走ではなく、水田地帯の長沼町での630kgなのである。
売り上げは8000万円弱で、労働力は本人と従業員が2人。麦は9割を十勝の商系業者に売り、1割を地元農協に販売。大豆はすべて商系だ。

また、宮井は遺伝子組み換え技術の国内解禁の運動を進める農業経営者のひとりであり、反対派による批判の標的になっている。きっかけは、2004年9月に、ある会合で宮井自身が「1997、1998年に米国から輸入した組み換え大豆の種子を実験的に栽培した」と発言したことに始まる。それを理由に長沼農協から大豆出荷を拒否されている。

たしかに、宮井の発言やパフォーマンスは村の常識の外にある。そんな宮井を妻の朋子は「いらぬことを言っただけ嫌われている。遺伝子組み換え技術が必要だというのだから、お金持ちがやるならともかく、なんで貧乏なあなたが自腹を切っただけで



▲オハイオ州での農家集会に飛び入りで参加し、ジョハンス米国農務長官に物申す宮井。

新・農業経営者ルポ／第42回

不肖 宮井、今年も嫌われています



▲友人の緑肥畑にラウンドアップを撒き、遺伝子組み換えコーンを確認する。遺伝子組み換え技術導入の活動をともにする、富田房勇放送大学北海道学習センター所長（前北海道大学教授）と。



ければならないの？」と苦笑する。さらに宮井は、友人が緑肥に播いたデントコーンにラウンドアップをかけ、そのなかに枯れない組み換えコーンが混じっていることを見つけた。国内でも緑肥や飼料として、組み換えコーンが既に栽培されている現実を、宮井は証明して見せたの



▲米国から機械設備を輸入し、社員とともに建設した大豆用の乾燥調整施設。

▶宮井が使うジョンディア密条播のドリルシーダ。トラクタはジョンディアの7810（185ps）。GPS付き。50haをわずか2日で播種でき、適期を逃すことはない。宮井は次に不耕起ドリルの購入を予定している。所有トラクタは古いフォード1台（80ps）を除き、すべてジョンディア（285psクローラ、185ps、110ps、90ps）の計5台。



▲4年前に購入した285psのクローラ、ジョンディア8410。これで6.5mチゼルプラウと6.6mのフィールドカルチベータ（ともにジョンディア）をひく。

ジョンハンス長官に直言

だ。宮井の畑では信用されないの、友人が播いた緑肥にラウンドアップを散布したのだが、それで被った友人の経済的被害は宮井が弁済した。そんな宮井は、地元長沼でも文字通り「悪役」であるが、彼は農業経営者として間違っているのだろうか。

9 ページ上の写真は、オハイオ州コロンバス郊外で開かれた農家集會でのワンシーン。出席した米国農務省のジョンハンス長官に直言する宮井である。

2006年の夏、筆者は米国の穀物協会の招待で、米国中西部の農家とモンサント社など、遺伝子組み換えに関する試験研究機関を視察するツアーに参加した。宮井を招待者の

ひとりに加えたのは、筆者の推薦だった。彼の遺伝子組み換えに対する関心の高さを知っていたからだ。

ジョンハンス長官との出会いは偶然だった。その前日、我々は全米トウモロコシ生産者協会（NCGA）の元会長であるフレッド・ヨルダーを訪ねた。ほかの視察者が神妙な質問を続けるなか、宮井はヨルダーやその息子と旧知のごとくに打ち解けている。20年以上前から米国の穀物農家や農機ディーラーと親しく付き合い合ってきた宮井にとつて、彼らは長沼で顔を突き合わせている隣人たちより心に馴染む存在なのかもしれない。

そんな出会いがあつての翌日、我々が訪ねた村でジョンハンス長官が農家集會に出席するとの連絡を受けた。我われも予定を変更して、会場を訪ねることにした。

そして始まった農家集會。最前列には、地域の名士とおぼしき人々が座っている。NCGAの元会長であるヨルダーも当然そこにいた。そしてヨルダーの隣には、いつの間にか宮井が座っていた。

地元選出の下院議員やジョンハンス長官のスピーチの後、司会者が長官への質問や陳情を促す。最初に手を挙げたのは、なんと宮井だった。

宮井は、米国の招待でここにいることの感謝を述べた後に、なんで日

本に向けた組み換え大豆種子の輸入を控えるのだ、というようなことを話した。ジョンハンス長官は想定外の日本人の闖入（ちんりゅう）と質問に当惑したよう

で、当然のことながら宮井の期待するような答えはなかった。後で聞いたところによれば、宮井はヨルダーに「ここに座れよ」と誘われ、発言してよいかと尋ねると「かまわないよ」と言われたという。どちらにしても、我われを引率してきた穀物協会のコーディネーターが冷や汗をかいたのは、想像に難くない。

このように、どんな場所でも臆することなくストリートに行動し、発言する宮井に、農業界といわずとも当惑することは多い。しかし、宮井の言葉にはいささかの悪意もない。むしろ皆にとつてもよいはずだという確信で発言していると、筆者には見える。そんな彼であればこそ、目先の損得やご都合主義で事実を曖昧にし、解決すべき課題に対して建前と本音を使い分ける者を敏感に見抜き、それに過剰に反応してしまうのだろう。それも宮井の正義感と言うべきなのかもしれない。世間知に長けた人からすれば、苦笑するのだからうが。

宮井と米国農業

宮井は幼少時代からよく農業を手

不肖 宮井、今年も嫌われています

伝う子供だった。

機械化も進んでいない時代である。当時中学生の宮井も、泥のなかに這いつくばっての稲作農業を続けるのは嫌だと思っていた。そんな頃、読んでいた学習雑誌に、飛行機を使って種播きをする米国農業の写真が出ていた。

「これだ！ これこそ先進国の農業だ。しかし、なんでわが家には飛行機がないんだ？」

このとき宮井はそう思ったという。これが宮井の米国農業との最初の出会いだった。

そして高校に進学後、初めて米国の地を踏むことになる。16歳のときだった。カリフォルニアの家庭にホームステイする機会を得たのだ。1974年、ベトナム戦争末期の混乱はあったが、まだ60年代の豊かな米国がそこにはあった。高級住宅街にあるホームステイ先の家族をはじめ、若い宮井が出会った人々が宮井をすっかり米国好きにした

家の仕事もよく手伝い、今の自分からは想像もつかないような真面目な高校生だった、と宮井は言う。だが、英語を学びたいと思って進学した大学は、約1カ月で退学している。先生と喧嘩をしたのが原因だった。その頃から今の気質が顕在化してきたのかもしれない。

退学後、宮井は一年間家の仕事を手伝った後に、オーストラリアの農業研修に行くことになる。期間は半年。南半球のオーストラリアなら冬の間に付ける。そこで英会話の力も身に付けた。

宮井が憧れるのは、米国での畑作農業だった。農家の気風は、オーストラリアでもカナダでも宮井の心に馴染んだ。しかし、世界で最高の経済大国・米国であればこそ、農業保護の水準も世界一であることを知っていたのだ。

米国で農業をすることを目指して、宮井は30歳のときにカリフォルニアの弁護士に依頼して、グリーンカード（永住権）取得の申請をしたことがある。最低5年はかかると言われていて、それまでに準備をすればよいと考えていた。ところが半年後に呼び出しがかかった。すぐに面接に来いという。残念ながら米国に移住する準備はできていない。その面接の延期もできず、結局それは諦めた。しかし、子供に米国で農業をする条件だけは作ってやろうと宮井は考えた。どうするかは子供が選ばばよい。妻に米国での出産を頼んだ。それで米国籍が取れる条件ができるからだ。小学生の長男は、札幌のインターナショナルスクールに通わせている。



▲宮井自慢のジョンディアのゴムクローラ・コンバイン9750STS。360psのエンジンを搭載し、縦軸の脱穀部を持つタイプ。刈幅は5.4mで、麦の場合で1時間に2ha、大豆では5haを収穫できる。3500万円で購入した。部品をあらかじめ在庫しておけば問題はない。



▲ダブルタイヤを履かせたジョンディア6600（110ps）でけん引するライムスプレッダ。米国製で8t積載できる。10mの幅で石灰から鶏糞までの散布が可能なこの機械を気に入っている。特に重量の大きな転炉スラグを撒くのに最適。

▼自走式ブームスプレーヤ（120ps、1900ℓタンクで18mブーム）。



その後も宮井と米国の付き合いはますます深まっていく。農業機械や施設は、トラクタを除けば、そのほとんどがノースダコタにあるジョンディアのディーラーから直接買っているものだ。トラクタはヤンマーが扱っているので、その付き合いを大事にしている。

86年にプランタを買ったのが最初だった。きっかけは米国で買った農業雑誌の広告。そこにミネソタ州内のジョンディアのディーラー20数カ所の連絡先が書いてあった。宮井は



▶工具類にはお金をかけている。このふたつのセットで100万円以上。耐久性に優れ、ボルトの山を潰すようなこともない。仕事が速くなるし、高い工具だと失くすことも減るので、結局は経済的だという。

全社に手紙を書いた。日本にいる自分にプランタを売ってほしいという内容だった。以来、宮井の手紙に返事をくれた人物と取り引きを続けている。その後、彼がノースダコタの支店にマネージャーとして移動すると、転勤先の店から購入するように

◀ホイールなどを含め、部品類は常に多めに在庫している。
▼アマゾーネの2軸ブロードキャスト。米国ではブロードキャストを使う習慣がなく、これだけはドイツ製である。



なった。そのマネージャーを介して、農家にも知己を広げていった。宮井は、彼らと実際にお金の関わる付き合いをするなかで、生身の米国の農業を見ることができたのだ。その豊かさも、厳しさも。

宮井の麦の収量が2倍になり、大豆も20%増収するようになったのは、米国の農業コンサルタントの力があったことだった。コンサルタントの仕事は、単に収量増大を保障するのではない。あくまでテーマは収益向上。コストを掛けて収量を上げるくらいなら、収量は少なくとも利益の最大化を目指す提案をしていく。特別な資材を使うことはまったくくない。ちなみに宮井の肥料代は、一昨年の800万円から昨年は500万円に下がっている。そして、雑草もアカザだけになった。

大リーグを目指す日本人

宮井は素直に国の政策を信じている。ただし、その変化を敏感に見抜き、それを積極的に利用する。

「国の政策の枠組みはしっかりしているのだと思う。でも、行政の末端にいくにしたがって、ローカルレベルがまかり通ってしまうことが問題なんです。現在の交付金のレベルは、農水予算3兆円のなかで3000億円。F15の20機分ですよ。日本には

それが200機あるのですからね。予算が4兆円の時代には、4000億円だった。減っていくとしても、穀類に関してはこの先5年や10年でゼロになるわけではないはず。むしろ対象とする農家の数は減るわけで、政策的に求められる条件以上のレベルをクリアしていけば、経営は何とかなるでしょう。日本が豊かな国である限り。それまでに与えられた条件のなかで、いかに体質強化をしていくかですよ。長期的には、子供も含めて米国での経営も考えています」

現在の売り上げが8000万円弱の宮井も、品目横断制度になって1000万円くらいの減収になる。仮にそうした交付金がゼロになったとしたら、彼の経営も限界ギリギリだ。しかし、条件に恵まれているとはいえず、十勝では純粋な畑作で経営を成り立たせている。この経営ノウハウを、一刻も早く実現したいと話す宮井なのである。農水省が泣いて喜ぶべき模範的農家ではないか。

筆者はかねてから、転作に伴う産地作り交付金をもらおう宮井を、冗談で「生活保護だよな」などとかからってきた。しかし、それはあくまで政府が定めた基準に従って得られるものだ。与えられた条件を最大限に利用して収益を最大化するのは、む

不肖 宮井、今年も嫌われています



▲中学生のときに憧れた飛行機は、米国で操縦免許を取った。2006年夏の帯広の展示会にもセスナで現れ、会場上空を低空飛行して面白がっていた。お金も随分使ったが、飛行機を介して人脈も広がった。

しる経営者としての責任である。少なからぬ集落営農組織が、何の経営展望も持たぬままに交付金の受け皿として作られていったことを考えてみればよい。交付金制度がモラルハザードの温床にもなっている農業界で、宮井は未来への投資や研究を欠かさず行なってきた。コストを下げ、収量を上げることで自らの経営を発展させ、農業の可能性を実践的に示しているのである。宮井は農業界の倫理観欠如が許せないだけでなく、せっかくな国が与えてくれたチャンスや技術の可能性を活かそうとしない

農業界や村人に苛立っているのだ。「嫉妬はしばしば正義の仮面を被って登場する」という言葉があるが、彼に対する批判や反発には、それに近いものがあるのではないか。これまで彼が農地購入を希望しても、様々な理由でそれが阻まれてきたことを、筆者はたびたび聞かされてきた。それも、農地の売り手本人というより、地域の農業に関わる組織や団体の判断によるところが大きい。単なる村人の嫉妬だというのなら、成長する経営者は甘んじてそれを受け止めるしかない。事実、宮井

は何かあるうとも経営を発展させてきたし、これからもそうするであろう。しかし宮井が言う通り、農民の無知を利用して、国の枠組みに従わない地域の論理を優先させてしまう農協や地方行政の現実には、多くの農業経営者たちが体験していることだろう。

こんな宮井の姿を見ていると、大リーグを目指した若い有能な選手と、それを阻もうとした日本プロ野球界の構図がダブって見える。ほんの数年前までテレビのニュースショーでは、「往年の名選手」がカビ臭い俗物親父の御託とともに、野茂やイチローを揶揄し続けた。それはムラ社会での多数派が、己を危うくするチャレンジャーや新時代を切り開く者をイジめる典型的な形として感じられた。

野球業界（ムラ）を支配してきたお山の大将やその取り巻きたちが、歴史の地殻変動に揺れる砂山の上でうろたえている姿である。提示される恵まれたギヤラを振り切っても、自らの可能性にチャレンジした野茂やイチローたち。彼らは、安楽さが自らの未来を閉ざすと考えたのだ。

彼らの活躍で、ニッポン野球村も変化し始めている。宮井を含めたチ



▲近くで見た雑草だらけの大豆畑。こんな人こそ遺伝子組み換え大豆が必要なのは、と宮井は語る。
▶宮井の大豆の雑草対策は万全。



ヤレンジする農業経営者たちの存在も、そういうものではないだろうか。ところで宮井は、大リーグ選手にたとえるなら、野茂かイチローか？ いや、やはり大リーグ挑戦組のなかで、ひとり悪役を演じた伊良部というべきか。そんな「嫌われ者」も含めて、未来は彼らのものなのだ。